

まえがき

世紀転換期は、新世紀が「グローバル化の時代」であることを予示した。「グローバル化」とは時空間の“圧縮”と“拡張”のことであるとされる。これは、“技術革新”によって物理的「空間」が時間的に短縮することで、社会的「空間」が“圧縮”し、また“拡張”することを、したがって、伝統的「規模」の組替えや再接合が起こっていることを意味している。それだけに、グローバル化の動態と構造をめぐって、また、“グローバル・ガバナンス”の現状と展望をめぐっても議論が交差している。

アメリカ合衆国は建国後2世紀半に満たない国家である。だが、戦後世界「秩序」の形成の牽引車となり、自らの政治経済・社会システムをグローバルに広げることになった。そのヘゲモニーに“かげり”がさしているとはいえ、なお、指導的位置にとどまっている。

本書は2部構成にある。第I部では、歴史過程も視野に収めつつアメリカがヘゲモニー国家に転成してくる論理と言説を辿るとともに、グローバル化のなかの現代国家の位置を政治学的に検討する。また、第II部では経済社会関係の国境横断的連鎖が深まるなかで多様な「グローバル・ガバナンス」論が浮上しているが、その論争の諸相を紹介するとともに、民主政の視点から課題を提示することになる。

いずれの諸国も世界的連関のなかで固有の展開をみている。この点ではアメリカも例外ではないが、その特徴は植民地を前史とし、建国後2世紀を経ずして自らのヘゲモニーを世界的に拡張したことに求められうる。それだけに、現代世界へのアプローチにおいてアメリカは不可避の位置にある。

「歴史としての現代」は「グローバル化の時代」であるとされる。本書はアメリカのヘゲモニーと結びつけることで、われわれの“いま(今)”に迫ろうとする、ひとつの試みである。